

# 一茶の農民意識

藤田 万喜子

はじめに

一茶は宝暦十三年（一七六三）五月五日、信濃国水内郡柏原村に農民弥五衛の長男として生まれた。江戸時代の身分制度、士農工商の中での一茶の身分は「農」である。その後、一茶は江戸に出て俳諧師としての生活を送り、再び生まれ故郷柏原に戻って農民として生涯を終わった。しかし農業に携わることなく俳諧師の暮らしてあった。

本稿では俳諧師である一茶の農民意識を作品の鑑賞を中心にして考察したい。

## 下下の国の風土

下下も下下下の下国の涼しさよ （七番日記 文化十年）

一茶は五十一歳にして、郷里柏原に定住する身となった。この句

は、下も下、そのまた下の下国に吹いてくる風のなんと涼しいことよの意味で、下国は生まれ故郷信濃のこと、一茶はその自らの郷国信濃を、気候・風土・経済・文化などの点で、上国に対して下国とみているのである。信濃の国などは、下国の中でも下の下、その下の中でもなお下の下に当たると言うのである。しかしここにはそれだけに誰に気兼ねも要らぬ気安さもあり、裸でいてもこんなに涼しいことはないといった、郷里への逆説的な愛情も窺える。

「俳諧寺記」に「杳芳しき楚地の雪といひ、木ごとに花ぞ咲にけるなど、ほんさうめさるゝは、銭金程きたなきものあらじと、手にさへふれざる雲の上人のことにして、雲の下の又其下の、下くの下国の信濃もしなののおのれの住る里」と言い、「おらが春」に「おのれの住める郷は」「雪は夏きえて、霜は秋降る物から、橘のからたちとのみならず、万木千草、上々国よりうつし植うるに、ことごと

とく変じざるはなかりけり」と記していることから、自然環境がきびしいための下国、また生活的に貧しいための下国の意識が見られる。

田の雁や里の人数ハけふも減る (七番日記 文化八年)

と、一茶は冬になって男たちが次々と江戸へ出稼ぎに行き、村の人数が減って、残った老人、女、子供が雪に埋もれて長い冬を越す悲しさを詠んでいる。

信濃の風土、殊に雪を詠んだ発句に、

是がまあつひの栖か雪五尺 (七番日記 文化九年)

ほちやくくと雪にくるまる在所哉 (七番日記 文化九年)

我郷の鐘や聞くらん雪の底 (七番日記 文化十年)

うら壁やしがみ付きたる貧乏雪 (七番日記 文化十四年)

梅どこか二月の雪の二三尺 (七番日記 文政元年)

雪散るやおどけも云へぬ信濃空 (八番日記 文政二年)

などがある。これらに雪国の暮らしを直視した一茶の生活観を見ることができる。

「是がまあ」の句には信濃が「つひの栖か」となった実感が込められているが、その感慨を「雪五尺」で表している訳で一茶の故郷を繋ぐ意識が雪であったことを示している。次の「ほちやくくと」と「我郷の鐘や」では家も木もすべてすっぽりと雪に埋まった豪雪

地帯の厳しさを詠んでおり、それを「ほちやくと」「くるまる」あるいは寺の鐘を「雪の底」で聞くと措辞した。雪本来の厳しい条件を受け入れた雪国人としての一茶の暖かい情を感じさせる。以上は雪を受け入れる人間についてであるが雪そのものにも目が向けられ、「うら壁やしがみ付きたる貧乏雪」と雪にも貧乏雪があり、それが壁にしがみついていると擬人化して見ている。このような厳しい雪国にも春が訪れてくるが、二月になっても「梅どこか」なのである。他所では梅が咲く頃であるのに信濃はまだ雪が「二三尺」も残っているという。まさに「おどけも云へぬ信濃」なのである。厳しい風土を厭いながらもそれを受け入れる情を同時に持っていたことを指摘できよう。

#### 一茶の生活環境

一茶が江戸に出たのは十五歳のときであった。江戸へ出ることになった事情も含めて十五歳まで暮らした柏原での生活をまずまとめておきたい。

一茶は父弥五兵衛、母くにの長男として生まれたが、この母が一茶三歳のときに死亡。このため幼い一茶を育てることになったのは同居していた祖母かなであった。祖母が「不便がりて、むつきの汚らはしきもいとはず、明暮背に負ひ、又首を下て薬を乞つゝ育て」

(日記断篇「祖母三十三回忌」) たお陰で、一茶は「竹の子のうき節茂き世中もしらで、づかく伸び」(同前)、成長していった。かわいがられていたものの、六歳の頃を回想したものに「親のない子はどこでも知れる、爪を唾えて門に立、と子どもらに唄はるゝも心細く大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に跨りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり。我と来て遊べや親のない雀 六才 弥太郎」(「おらが春」) とあるように、動物を相手にしたり、一人遊びをしたりしていることが多かったようだ。こういった環境が孤独な性格を形づくることになった。

一茶八歳のとき、新しい母さつが家族として加わった。農家にとって働き手一人を得ることはその暮らしに大きな影響を与える。さつは勝ち気な性格で、よく働き、家運は上昇してゆくが、一茶にとっては優しい母ではなかった。やがて弟が生まれ、家の中は不和が絶えなかった。祖母が亡くなった後、一茶と継母の対立はますます激しいものになった。この中で、継子のひがみ根性が形成されていた。間に立った父は「後ののはの中むつまじからず、日々に魂をいため、夜々に心火をもやし、心のやすき時ハな」(「父の終焉日記」) かった。父は二人が別々に暮らせば互いに心も通うようになるのではと考えて一茶を江戸に出すことにしたのだった。

次にこうして出ていった一茶の江戸での生活はどのようであった

かについて考えてみたい。初め十年間ほどは何をしていたか不明で俳諧にいつ出会ったかも不明であるが、天明七年(一七八七)、二十五歳の時には、上総や下総方面に勢力を持っていた葛飾派の傍系である二六庵竹阿のところに出入りしている。二六庵竹阿が亡くなって、寛政二年(一七九〇)、二十八歳の時に同じ葛飾派の溝口素丸の門に入った。同年末には書記のような役目をする執事にもなり、俳壇での位置を確立していった。竹阿の死によって二六庵を継ぐ形になった一茶は竹阿の弟子のいた四国、九州へ俳諧修行に旅立つ。

この寛政四年(一七九二)から寛政十年(一七九八)の六年間の行脚によって得た俳人との交友がその後の俳諧活動の基盤となっていく。江戸に戻って有力俳人夏目成美の庇護を受け、上総、下総を巡回するなど俳諧師として活動することになり、「俳人番付」の俳人に選ばれるほどになる。しかしその生活は定住の家もなく寄食の暮らして貧乏そのものであった。

一茶自身がそのような生活のために自然と対象としてとらえるのかもしれないが、「貧乏」・「乞食」を詠んだ句が多く見られる。当時の発句に

秋の風乞食ハ我を見くらぶる (文化句帖 文化元年)

わが春やタドン一ツに小菜一把 (文化句帖 文化元年)

梅が香やどなたが来ても欠茶碗 (文化句帖 文化元年)

元日や我のミならぬ巢なし鳥

(文化六年句日記)

がある。

「秋の風」の句はこの「乞食」にさえ見比べられるような姿の自分を詠んだものである。「春」「梅」「元日」といった華やかなものに貧乏を取り合わせて、より貧乏を引き立てている。

当時の江戸人は江戸へ出稼ぎに出る信濃の農民を

雪降れば椋鳥江戸へ食ひに出る

椋鳥も毎年来ると江戸雀

と言って揶揄し、「椋鳥」と呼んで嘲笑していた。一茶自身が江戸に来たのは口減らしのための出稼ぎのためではなかったのだが、江戸人からはさげすまれる田舎者農民に違いなかった。一茶を庇護した成美からさえ、

「とかくく／＼なつかしく存候。例の貧俳諧、貧乏人の友もなくて困り入り申候。勿々早く立戻り給はんをまつのみ。先日谷中の一瓢上人に招かれ、一夜泊りて俳諧いたし候。其夜探題に、

花すゝき貧乏人をまねくなり

と口吟申候は、闇に先生の事をいひ出したるなり」

(文化五年 一茶宛書簡)

と先生と呼ばれる一方で貧乏人と言われていた。一茶も

椋鳥と人に呼るゝ寒哉

(八番日記 文政二年)

と詠んで、自身のことを椋鳥と言い、あるいは信濃国乞食首領一茶、乞食一茶とも言い表している。

豪商の庇護を受けて江戸で俳諧師として生活する上で常に一茶に付いて回ったのは「椋鳥」と呼ばれた田舎者の農民意識と貧乏人意識であった。

この意識が、江戸での放浪生活を清算して故郷である粕原に安住の地を求めさせることになる。これは農民として生きるということの意味するものでその傍ら俳諧師として生きることであった。

#### 発句にみる農民意識

農民の子として生まれたことは、一茶にとって封建社会制度の身分のうえで取り消すことのできないことである。江戸に出て俳諧師となつてからも周囲から意識させられたことは農民の身分であった。

一茶が作った発句の中から「農」にかかわる季の詞を抜き出してみると、代掻く、苗代、苗代田、野焼、麦田植、田打、田返す、畑打、畑返す、種蒔く、青田、田青む、雨乞ひ、田植、田草取り、稗植る、粟蒔く、案山子、鳴子、毛見、砧、ごぼう引く、新米、今年米、そばの花、稲、早稲、陸稲、稲の花、稲の穂、田を刈る、刈り穂、落穂、稲掛ける、稲扱く、粃、新藁、早稲藁、ひつぢ田、麦蒔く、そば刈る、大根引、などがある。

このうち農家の仕事で重要な位置を占める田植を取り上げると五十二句ある。仕事ぶりや田植風景を客観的に詠んだものもあり、この中で意識が詠み込まれているものに

もたいなや昼寝して聞く田うゑ唄 (一白宛書簡 寛政十年)

藪陰やたつた一人の田植唄 (七番日記 文化十二年)

よその子や十やそこらにて田植唄 (七番日記 文政元年)

妹が子や笠をほしさに田を植る (八番日記 文政二年)

おのが里仕廻てどこへ田植笠 (八番日記 文政二年)

只つた今旅から来しを田植馬 (八番日記 文政二年)

露の葉にいはしを配る田植哉 (七番日記 文化十三年)

笠とれば坊主也けり田植唄 (文政句帖 文政五年)

むだな身も呼び出されけり田植酒 (文政句帖 文政五年)

などがある。

「もたいなや」の句は、春が来て草木が新しい生命を生み出すころ、農民たちも秋の実りを念願して田を耕し田植をする、農民たちがのどかな田植唄に合わせて苗を植えているのである。田植唄は労働のための励ましの唄で、それを一茶は昼寝をしながら聞いていて、「もったいない」と感じている訳で、ここに一茶の農民としての自覚、しかも農に従わない自責の念があったことを指摘できる。この感情は

耕やさぬ罪もいくばく年の暮 (文化句帖 文化二年)

春がすミ鋤とらぬ身のもったいな (文化句帖 文化三年)

穀つぶし桜の下にくらしけり (文化句帖 文化三年)

耕やさずして喰ひ、織らずして着る体たらく、

今まで罰のあたらぬもふしぎなり

花の陰寝まじ未来がおそろしき (句帖写 文政十年)

のような句にも表されている。

一茶は農民でありながら耕さぬ、働かぬ身で生活していることを「罰あたり」と言い表した、ここにも罪悪感を見いだすことができる。

次の「藪陰や」は、大勢でにぎやかに唄い囃す田植唄ではない。

農家によっては「たつた一人の田植唄」ですべての仕事をこなさなければならぬ事情がある。これを捉えたのである。

また、農家では大人ばかりでなく子供までが働き手の一人になる。それを詠んだのが、「よその子や」と「妹が子や」の句。働き手とならないような子供は

畠打や子が這ひ歩くつくし原 (八番日記 文政二年)

のように、子供を見てやる暇も惜しんで農作業をしている親の傍らで、勝手に這い回らせられている。

農家では一人の労働を軽くするために互いに助け合う。これを詠

んだのが「おのが里」や「笠とれば」の句である。僧侶までが田植をしているという。人間だけでなく「馬」までも借り出されて「只つた今旅から」戻ったばかりであるのに休ませることなく「田植馬」として使う現実なのである。

このように農耕の実態、農民の生活を的確に詠んでおり、ここに耕さない身であるが自分も同じ農民であるという意識が存在していることを指摘できる。

この互いに共存しているという意識は「露の葉に」や「むだな身も」にみることができ、「むだな身」というのは一茶のことであろう、田植の労苦をねぎらう席に何もしない一茶までも仲間に入れる農民の姿が表されている。

この充実した気分は

リン／＼と凧上りけり青田原（七番日記 文化十三年）

という田園風景の作品につながる。

### 連歌にみる農民意識

一茶の連歌を巻いた時期を、寛政年代から文化年代にかけての、諸国を行脚して交友を広め、江戸に戻って江戸俳壇で活動した時期と、文政年代の、帰郷して定住以後の時期とに大きく分けることができる。

寛政四年から寛政十年まで一茶は西国行脚に出ている。江戸を発って東海道を通り、京阪で夏を過ごし、秋、淡路より四国に渡り、さらに九州方面へ向かった。翌五年の正月を肥後八代で迎え、九州を巡り長崎に滞在。六年も引き続き九州各地を巡り、四国へ引き返す。七年は、四国より大阪、堺、高師の浜に遊び、十月には近江義仲寺の芭蕉忌に列した。そして八年に四国に渡り、松山地方に滞在。九年は春に松山を発ち、備後福山に滞在し、京阪へ向かった。翌年の十年に郷里に立ち寄り、江戸へ帰って来た。

この旅は、前にも述べたが、師事していた二六庵竹阿が亡くなり、師の知友を訪ねての、俳諧修行を目的としたものであった。

この旅に出た年に、遠江の金谷月哉を訪問し短歌行形式の連歌を巻いている。一茶が月哉と巻いた短歌行は初折の表・裏で終わっており、完成の形で残されていないが、俳諧修行をして回ろうとする一茶の意気込みが伝わってくるものである。残されている句稿の展開を記すと次のようになっている。

凌霄をかざして烏藤何百里

月哉 夏

甚麼関なく国の涼風

一茶 夏

胴の間に蝙蝠いくつ夕暮れて

哉 夏

黒き男等物喰ふ月

茶 秋

長宦に叱らるゝ事露もなし

哉 秋

独り娘のみづからが恋

茶 雑

立ッ居つ後めたくも物狂ひ

哉 雑

馬糞吹散る四郡りの橋

茶 雑

鳥にも交る鳶鷹哀也

哉 冬

油揚買て戻る重箱

茶 雑

先花の笠も馴みの掛所

哉 春

いく世目出度両吟の春

茶 春

この中で

独り娘のみづからが恋

立ッ居つ後めたくも物狂ひ

と恋の句が続いた後、一茶が

馬糞吹散る四郡りの橋

と恋離れの句を示している。前句と合わせての意味は、「物狂いの仕業であろうか、馬の糞が四郡りの橋に吹き散らされて凄まじいことであるよ」となり、叙景の句に転換させてしまった。恋の句から離すために農道を連想させる「馬糞」を据えた発想に一茶の農民の生活を思わせる。

旅を重ねて寛政八年松山に立ち寄った折りに、松山の俳人栗田橋堂と交友を結び、橋堂の歓待をうけている。この折りの寛政八年十月に巻いた

初雪や鳥屋の鳥の朝の声 橋堂

を発句とする栗田橋堂と一茶の両吟歌仙があるが、表六句は次のようになっている。

初雪や鳥屋の鳥の朝の声

橋堂 冬

堀を真向に寒き茶畑

一茶 冬

草の中元結干す杭打ぬらむ

橋堂 雑

蜻蛉つい行終かへる月

橋堂 秋

片照の続はつゞく秋風に

一茶 秋

飯籠釣ルすうら口の露

一茶 秋

発句は「今年初めての雪であるよ。朝の時を告げる鳥の鳴き声が聞こえて目が覚めた。寒いと思ったら雪が降っていた。さっきの鳥は雪が降っていることを知らせるように鳴いたのかもしれない。」の意味。この意をくんで一茶は脇句を発句の雰囲気を考え、寒さに凍えるように茶畑が広がっている農村の風景を詠んでいる。

橋堂が二句続けて詠んだ後、五句目に一茶が、山と野原を配置した。「山を月が照らしているところに秋の風が吹き、その風が野原をずっと遠くまで吹いて行くよ。」と山に月が片照らしている情景にしたのである。「続けばつゞく」というのは山裾からずっと吹き抜けていく状態を表現したものである。そしてこの句を承けて六句目、「飯籠」の短句を付けた。「風がずっと吹き抜けて、それが農家の裏

口まできて、吊るされている飯籠を揺らしている。その辺りには折  
りから露が降りている。」と前句の「秋風」を承けて場面を転換さ  
せた。「片照」を承けて「うら口」、「秋風」を承けて「釣ルす」が  
導き出された。風に揺れている飯籠を月が照らすといった農家の情  
景が浮かぶ。

旅先で、しかもその土地の有力な俳人と持った座で示した一茶の  
句から一茶が農民であった自覚が分かる。

次に故郷柏原に戻り、江戸帰りの宗匠として俳諧活動をし始めた  
頃の

鼻先の生姜畑やしぐれ 春甫

を発句とする歌仙の表六句を取り上げてみる。この歌仙は「文政二  
年九月十七日夜会」と前書きがあり、一茶と、一茶を師と仰ぐ人々、  
春甫、松宇、呂芳、素鏡、柏葉、掬斗、士英、魚淵の九人で巻いた  
ものである。『八番日記』によれば、一茶は文政二年九月十五日に  
長沼に入り、その翌日、弟子の一人である佐藤魚淵宅の菊会に招か  
れ、菊見物をした。更にその翌日は「春二入、二歌仙始」とあって、  
長沼の門人たちと春甫宅で俳諧をおこなったのであった。

六句は次のようになっている。

鼻先の生姜畑やしぐれ 春甫 冬

囲炉裏ばた迄鶏遊びつゝ 一茶 冬

手廻しになんぼ「も」箒を結立て 松宇 雑

川の御幸の近よりにけり 呂芳 雑

植添し松に早速三ヶの月 素鏡 秋

詠ひむきにさをしかのなく 柏葉 秋

このうち第三までが農村の風景、生活に関わるものである。

春甫が示した発句

鼻先の生姜畑やしぐれ

は、「や」の切字を用い、名詞止めの、発句の格を有した詠みぶり  
で、「私の家は、鼻先まで生姜畑が広がっている田舎住まいである。  
雪の多いここでは、冬になってこのところよく時雨れるようになっ  
たよ。皆が先生を囲んで楽しく歌仙を巻こうというときに、丁度興  
をそえるようにひとしぐれ降って来た。」の意味。

家のすぐ近くに生姜畑の作ってあるという農村の風景を示された  
一茶は、

囲炉裏ばた迄鶏遊びつゝ

と脇を付けた。「外はすぐそこまで生姜畑が広がっていて、部屋に  
は囲炉裏にがきつてある大きな農家。冬のため、その土間で鶏を飼っ  
ている。囲炉裏の火があかあかと燃えて暖か、その囲炉裏のすぐ端  
まで鶏が上がって来て遊んでいる。なんと幸せな一時であるよ。」  
というのである。農家の外の風景から家の中に景を置き換え、その



農家を引き立てて詠み添えている。畑―囲炉裏―鶏と農家に関わり  
の深いものが取り合わされて、農村の風景がより彷彿してくる。

このあと、弟子たちが順に一句づつ付けていくのであるが、松宇  
は鶏の遊ぶ囲炉裏端で仕事をする農家の人を配し

手廻しになんぼ「も」箒を結立て

と詠んで、「冬は外の仕事ができないので専ら囲炉裏端で藁を編ん  
だりするのだが、今日は箒作りをしている。ちょこちょここと鶏が囲  
炉裏の端に上がって来ては汚すので、前もって何本も箒を用意して  
いるのだよ。鶏が汚してもかまわないように。」とした。これは一  
茶の示した農家の情景にそってそこで暮らす農夫の生活を表した。

この後に続く三句をみてもどこことなく田舎的な雰囲気がある。  
(この歌仙の場合全体に漂う雰囲気でもある。)これは、一茶を囲ん  
でこの座に集まった弟子たちが皆信濃の人々であり、一茶も含めて  
自然環境、生活環境において共通の意識を有していることからくる  
ものと考えられる。

#### おわりに

一茶は、自ら「下も下下下の下国」というように「下国」の  
意識を持たざるを得ない故郷に生まれた。

これは一茶の精神状況として重要である。

加えて一茶は農家の長男として生まれた。幼くして母を亡くし、  
後に来た継母とは折り合いが悪かった。このような家庭環境の中で  
一茶に培われていったのが孤独、継子のひがみといった性格であっ  
たことは十分理解できる。

江戸へ出てからは、田舎者、椋鳥とさげすむ江戸人にとって一茶  
は出稼ぎ農民にすぎなかった。やがて俳諧と出会うが、その生活は  
定住の家もなく、貧乏そのものであった。

江戸の生活で常に意識させられたことは自分が貧乏であること、  
田舎者の農民であったのである。

故郷に帰って俳諧師として生活しても農民の意識をその生活の中  
で抱くのは当然のことで、俳諧の中で人間としての真情を吐露する  
形で、農民としての心が表現されるのも当然のことである。

この稿では、風土、環境の考察とともに、文学作品にあらわれた  
農民意識について眺めてみた。

#### 参考文献

- 『一茶全集』第一巻 信濃毎日新聞社 昭和54年8月
- 『一茶全集』第五巻 信濃毎日新聞社 昭和53年11月
- 『一茶全集』別巻 信濃毎日新聞社 昭和53年12月
- 『一茶の総合研究』矢羽勝幸編 信濃毎日新聞社 昭和62年11月